『好感度パラメーター』（作品タイトル）

小山　ラム子（著者名）

4,749 文字（本編文字数）

あらすじ（140 字以内）

あるときから、俺は会話をしている二人組の頭上に、ハートマークが見えるようになる。それはピンク色のつき具合によって相手への好感度が分かるパラメーターだった。職場の先輩で、好感度をうまく扱う田中さんに憧れを抱きつつ日々仕事をしていくなかで、元気のない様子の後輩、鈴木さんに気が付く。

（おっ、好感度上がってるじゃん。やるなあ、少年）
　道路の向こう側から歩いてくる男女の高校生二人組を見て心の中で呟きながら、俺は微笑ましい気持ちになった。
　梅雨前のさわやかな初夏の空気のなか、その清々しさに負けないくらい、若い二人の姿は眩しかった。
（ま、俺だってまだ若い範疇か）
　大学を卒業し、新卒で今の会社に入社して五年。若さが眩しい、なんていったら周りのお姉さま方に怒られてしまう。
（で、これが見えるようになってからは一年ちょっとか）
　俺は、意識して高校生二人組の頭上に目をやった。
　そこに浮かぶのは、俺にしか見えないハートマークだ。
　透明なハートは、男子のほうには八十パーセントほど、女子のほうには六十パーセントほど、ピンク色がついている。
（二か月前、同じ二人を見かけたときは、女子のほうが五十パーセントにも満たなかったんだよな）
　それが今や、半分以上がピンク色に満たされている。
（そこまでくれば、特別な関係になる日も遠くないぞ）
　男子生徒に向けて、心の中でエールを送る。
　転んで頭を打って以来見え始めたこのハートマーク。
　それが相手に対しての好感度を表すことに気が付いたのは、このハートマークが見えるようになってから、割とすぐのことだった。
　この好感度というのは、恋愛、友愛、親愛、と相手によって種類は変わってくるけれど、要するにプラスの感情である。
　これが見えるのは、会話をしている二人組のそれぞれの頭上だ。
（俺と話す相手にも見えたら便利なのに、他人同士じゃないと見えないんだよなあ）
　まあ、見えたら見えたで振り回されるだろうし、自分に関わる好感度なんて見えないほうがいいのかもしれない。
　そんなことを考えながら会社に着くと、真っ先に出会ったのは田中さんだった。
「おはよう」
　品のいい微笑みを浮かべる田中さんに、俺はあわてて「おはっ、ざいますっ」なんて間抜けな返事をする。
　あ、田中さんだ、と気が付いたときにはいつも田中さんから挨拶をされているので、俺から声をかけられたことは一度もない。
　俺より三年前、つまり、八年前にこの会社に入り、そして二年前から俺と同じ支店に勤務するようになった田中さんは、人当たりも良く仕事もできる女性で、俺にとっては憧れの先輩である。

艶のある黒髪を一つにまとめ、細フレームの眼鏡をかけたクールな印象と、にこっ、と笑みを浮かべたそのギャップがまた素敵な方だ。
（元々尊敬していたけど、このハートマークが見えるようになってから、さらにすごいと思うようになったんだよな）
誰からも一目置かれ、目立った敵もおらず、関わる人全てと問題なくコミュニケーションをとれている田中さん。
その田中さんのすごいところは、田中さんから見て好感度の低い相手にも、そんなことをおくびにも出さない点だ。
田中さんからの好感度の低い相手は、正直いうと俺も苦手とするタイプの人達だ。
相手のお人好しさにつけこんで自分の仕事を押し付けようとしてくる人、悪口を言い合うことがコミュニケーションだと勘違いしている人、仕事ではなく派閥争いに勤しんでいる人、等々だ。
田中さんへの好感度がゼロの社員はいないが、（このハートマークはプラスの感情しか表示しないので、どの程度嫌いなのかは分からないが、とりあえずゼロの場合は、嫌いか無関心かである）全員からとても高い好感度をもたれている、というわけでもない。
田中さんからみて好感度の低い相手（こちらはゼロの相手もいる）は、その相手からみた田中さんへの好感度は大体二十パーセントから三十パーセントである。
色々な人を観察した結果分かったのは、二十パーセントから三十パーセントという数字は、「いい人だし、好き寄りではあるけど、深くは踏み込めない」程度の好感度だ。
おそらく、田中さんは、あまり関わり合いたくない相手は、意識して相手からの好感度を抑えているのである。
田中さんは仕事として付き合ううえで、少々厄介な人相手にも、礼儀正しいし、笑顔で雑談にも応じる。
ただ、自分の内側にはいれさせない。
一方、田中さんからみて好感度が高い相手は、相手からの田中さんへの好感度も高い。
やはりその相手は、田中さんのように信頼できる人であり、誰もが一緒に仕事をしたいと思える人である。
（好感度なんて目に見えないものを完璧にコントロールしてるんだよな、田中さんは）
そんな田中さんのことを思い、俺も（よしっ）とパソコンに向かう。
（俺も田中さんみたいに、仕事も対人関係も問題なくこなす社会人になるぞ！）

そんな日々を過ごしていた俺に、気になる相手ができたのはそれから一か月ほどたってからのことだった。
相手は、一つ年下で、今年度から同じ支店の隣の部署に配属された、鈴木さんという女性だ。
気になる、といっても恋愛事ではない。言葉の意味、そのままである。

（鈴木さんって、田中さんとは正反対のような子だな）
　仕事ができない、という点ではない。というか、鈴木さんも仕事はできる。
（厄介な人達に好かれちゃってるな）
　田中さんが意識して好感度を抑えている人達からの好感度が、とても高いのだ。
（好感度って、高ければいいってもんじゃないんだよな）
　これも、日々色々な人を観察してみて得た結果である。
　自己本位な人は、わがままを聞いてくれる人や、文句を言わない人が好きだ。やられっぱなしで文句を言えない人や、頼みを断れない人は、そんな人達からの好感度が高い。
　もちろん、逆側は低いのだけれど。
（鈴木さん、いい人って感じだもんな）
　明るすぎない茶髪をボブカットにした鈴木さんは、いつも笑顔で仕事にも一生懸命に取り組んでいる様子で、周りからも好かれている。
　そんな鈴木さんと廊下ですれ違ったときに、（おや）と思ったことがあったのだ。
（めずらしく、うつむいているな）
　仕事の業務であまり関りがない俺にも、鈴木さんは明るく挨拶をしてくれる。
　相手に気が付き、挨拶をするその速さは田中さんに匹敵するほどだ。
「お疲れ様」
　そのとき初めて俺から挨拶できたのだが、鈴木さんはびっくりしたように顔を上げて「あ、すみません！　気が付かなくて！」と、こちらがあわてるほど恐縮していたので、俺のほうが申し訳ない気持ちになってしまった。
　それから意識して鈴木さんを見ていて、気が付いたのだ。
（好感度のバランスが悪いな）
　俺が通勤途中に見かける高校生達のように、片方からの好感度が高く、もう片方の好感度がそこそこのときは、高い側が少しずつアプローチをすることによって、そこそこ側が高くなり、バランスもとれてくる。
　しかし、鈴木さん側の好感度が低いのに、相手側の好感度が高く、しかも、相手は鈴木さんの都合を考えずにぐいぐいと自分のしたいように意見を押し付けており、それを鈴木さんがうまくかわすことのできない今の現況では、バランスがとれる日はこないだろう。
（田中さんに、アドバイスしてくれるよう頼んでみるか？）
　そう考えたけれど、すぐにそれは打ち消した。
（いまだに『おはっ、ざいますっ』なんて緊張気味に挨拶する俺が、そんなこと頼めるわけないだろ）
　そんな情けない次第である。
（そもそも、俺が鈴木さんに対して何かすること自体が、余計なお世話ではないか）
　俺と鈴木さんは、別の部署だし、それほど関わったこともない間柄だ。
（人間関係に悩んでいるだろう鈴木さんにしてみれば、これ以上他人との関りが増えるほ

うが負担になるんじゃないかな）
　そんなことをぐだぐたと思いながら、何もできずに日々は過ぎていった。
　しかし、その事態を無視できなくなったのは、うつむく鈴木さんに再度廊下で出会ってからだった。
「鈴木さん」
　思うよりも早く声がでていた。前と同じく驚いたように顔を上げた鈴木さんとばっちり目が合って、俺は前よりも動揺してしまったが、ここまできたら腹をくくらなければ、と覚悟を決めた。
「仕事でも会話でも、断っていいことも、付き合わなくてもいいこともあるし、それをしたことで鈴木さんの評価が下がることは絶対にないから。もし何かあったとしても、鈴木さんに味方する人のほうが絶対多いよ」
　そう言った俺を、鈴木さんは、ぽかん、とした表情で見つめた。
（やばい、気まずい）
　次の言葉がでてこないまま俺もかたまっていると、「いいこと言うね」と後ろから声がかかった。
　声の主は、なんと憧れの田中さんであった。
「わたしもそう思うよ。実は気になってたんだ」
　田中さんはそう言って俺の隣に並び、「先超されちゃった」といつもの素敵な微笑みを浮かべた。
「えと、あの、わたし」
　そう言いながら、鈴木さんの大きな瞳にはみるみるうちに涙があふれていった。
　俺があたふたしているうちに、田中さんは開いている会議室にミーティング中の札をかけ、「わたし達がしばらく席を外す適当な理由考えて、課長に言っておいて」と俺に指示して、鈴木さんと一緒に会議室へと入っていった。
　今度は俺がぽかん、とする番である。
（これ、俺が出る幕なかったんじゃないかな）
　そんなことを思いつつも、（当初の予定通り、田中さんに見てもらえてよかった）なんて安堵もしつつ、その場を後にした。

「おはようございます！」
　初めて会ったときのような明るい声で鈴木さんが挨拶をしてくれたのは、翌日のことだ。
「おはよう」
　昨日のことを聞いてもいいものかと考えていると、「あの、昨日はありがとうございました」と鈴木さんのほうから話を切り出してくれた。
「いや、俺はなにもしてないよ」
「そんなことは全くないです。田中さんも言ってました。わたしの様子がおかしいことに

気が付いたのは最近のことで、でも声をかけていいか迷っていたそうです」
（まあ、田中さんは踏み込むべきかどうかを判断するのに慎重な人だもんな）
「そんな風に思っていたところで、信頼できる後輩が心配しているのを見たから、声をかける決心をしたって。そう言ってました」
　信頼できる後輩。
　思いもかけずに出てきたすごいワードに対して感動に打ち震えるのはとりあえず後にして、俺は気になっていたことを聞いてみる。
「それで、その、鈴木さんの悩みとかは……」
「田中さんに色々アドバイスしてもらいました。実は、昨日田中さんに付き添ってもらって、部長にも現状を聞いてもらったんです。仕事の割り振りとか、また見てもらえるそうです」
　さすが田中さんである。
「そっか。じゃあこれからきっと、どんどんよくなっていくね」
「はい。すみませんでした。わたしが未熟なせいで、色々とご心配をおかけして」
　鈴木さんはすごいな、と思う。
（相手のせいではなく、自分が未熟なせいだ、と言えるんだ）
　俺は、ふと鈴木さんと自分の頭上に目をやった。
　相変わらず、相手から自分に対する好感度も、自分から相手に対する好感度も見えてはくれない。
（でも、見えなくても分かる）
　俺からの鈴木さんに対するハートマークのピンク色は半分を超しているだろう。
　それが、恋愛なのか友愛なのか親愛なのか、どんな種類かはまだ分からないけれど。
（まあ、過剰な好感度に悩んでいた鈴木さんだし、あまりぐいぐいこられても嫌だろうな）
　そんなことを思っていると、急に鈴木さんがぐいっ、と前のめりになって口を開いた。
「あの、それで何かお礼がしたいので、今日のお昼とかご馳走させていただけませんか⁉」
「え？」
　きょとん、と返す俺に、鈴木さんは「ご迷惑じゃなかったら、ですけど」とあわてたように付け足した。
「え、いや、嬉しいけど、さすがにご馳走されるのは申し訳ないよ」
「じゃあ、せめてコーヒーだけでも！」
　食い下がる彼女の頭上に、見えないはずのハートマークが見える。
（ピンク色が、半分を超えているように見えるのは俺の願望だろうか）
　願望なのか、そうではないのか。
　それが分かるのは、きっとそう遠くない未来だろう。

（了）